

◆第12話◆ 本とデジタルデータ

21世紀の今、私たちは、パソコンを利用して作成したテキストデータ、インターネットを介して閲覧するWEBデータなど電子データの氾濫する社会に生きている。つまり、デジタル社会にどっぷりと浸かっているということである。しかし、私たち人間は、どのように努力、工夫をし、頭を捻ってもデジタルにはなれない。最後まで、アナログなのである。このことは、断じて忘れてはならない。筆者は、第1話でも同じことを述べた。

本稿は、自校史が「本」という形をその表現形態とする前提で記述を進めてきた。近年、「電子ブック」などという商品が出現して、紙からデータへ、という移行が行われているかのような世の中に見える。言い換えれば、デジタル礼賛のように受け取れるのである。ここにある落とし穴には、十分に注意、警戒することをお勧めする。

では、「本」「書籍」の特質、利点は、どこにあるか。「本」は、物理的に人間が認識できるものである。質・量ともにしっかりしたものがある。表示する文字は、人間の目に抵抗感がない、といえる。その文字は、時間が経過しても消滅しない。前を見て後ろを見て、行ったり来たり作業は、パソコンより合理的で速い。本は、改竄に強い。書き込む、切り取るそして貼り付けるという方法が「本」に対する改竄方法の例である。何者かが、何かやったなということがすぐにわかる。

続いて、「デジタルデータ」の特質、利点は、どうであろうか。デジタル化のメリットは、事項の検索がスピーディーにできることがまず挙げられる。Windowsは、「マルチタスク」を標榜している。しかし、まだ複数ウィンドウの同時アクセスには対応できていない。つまり、販売側は、常に自身に都合の良いことを訴える。この場合は、基本はシングルタスクであり、セカンドウィンドウは、画面裏側に表示しています、ということである。言い換えれば、マルチタスクとは、同時作業ではなく文書作成、表計算など複数のアプリケーションを切り替えながら、1台のマシンで操作できますよ、ということである。ここで、わかることは、デジタル画面を先の本のように使用するとスクロールという時間、画面切り替えによる人間の対応の遅さから、難しい。だから、事項索引や人名索引といった使い方では、ずっとデジタルデータの方が有効である。

デジタルデータは、スタンドアロンでは、意味をなさない。インターネット上で利用するものであると思う。この場合、あくまで、ソフトウェアでの防御になる。ソフトウェアである限りは、悪意の侵略に晒されることを覚悟しなければならない。いたずら好きハッカーは、絶対にいなくなることを自覚すべきである。

第1話にもあるが、デジタルデータは、複製することがた易い。これは、もろ刃の剣である。一つ間違えば、改竄につながる。第三者対策は、ソフトウェアでのセキュリティだけでデータを守り切れるかどうか不安な点が残る。今では、PDFでさえ、書き換えができるようになっていよいよご油断召されるな、

ということである。

したがって、「本」は、セキュリティにおける優位性が証明され、どこまで行っても捨てるべきものである。